

令和5年度第4回乙訓地区小中学校使用教科用図書採択協議会 概要

日時：令和5年6月28日（水）

午後1時30分から同5時15分まで

場所：長岡京市立図書館3階 大会議室

1 開会・挨拶

西村会長（長岡京市教育委員会教育長）

2 出席者

(1) 協議会委員

- | | | |
|-----------|------------|------------|
| ○ 西村文則 会長 | ○ 永野憲男 副会長 | ○ 馬場信行 副会長 |
| ○ 福澤秀夫 委員 | ○ 京樂真帆子 委員 | ○ 盛永俊弘 委員 |
| ○ 松本克彦 委員 | ○ 吉川栄一 委員 | ○ 南頭融 委員 |
| ○ 淵田瑞希 委員 | ○ 野田昌之 委員 | ○ 大柳充 委員 |

以上、12名

欠席者 流石智子 委員、中野緑 委員、 畠山亮 委員
大下和徹 委員、宮本佳子 委員

(2) 研究員

代表研究員及び市町（総括）指導主事22名

(3) 各市町教育委員会等事務局

長岡京市 5名

裕教育部次長兼学校教育課長、渡邊学校教育課主幹兼学校教育係長、
 春名総括指導主事、嶋崎主事、森下主事

向日市 2名

紺野学校教育課長、久枝主事

大山崎町 2名

吉田学校教育課長、飯山学校教育主幹兼学校教育係リーダー

オブザーバー

京都府乙訓教育局 渡邊企画教育課長

2 議題 調査研究の中間報告

代表研究員から、調査研究の中間報告を行った。

(以下、質疑応答及び意見。質疑を「○」、応答を「→」、意見を「◎」で表す。)

① 国語

【国語】

- 東京書籍に「多層指導モデルMIM」とあるが、具体的にどのようなものか。
→ 近年広まっているもので、促音や拗音等の読み間違いが多いなど、読むことに困難のある児童に対する指導方法。手拍子による指導など、主に小学1年生の指導段階において実施するもの。

- プログラミング的思考とは具体的にどういうことか。
→ 物事を進めるときにその目的に向けて条件分岐や同じことを繰り返すなどしながら整理し、論理的に考えていく力のこと。

- 5・6年生の教科書は、教育出版のみ上下巻の分冊となっている。振り返り学習を行う場合など、分冊による不便が生じることはあるか。
→ 教育出版は、1年間に2度、児童をわくわくさせたいという思いで全学年を分冊にしているとの趣旨であった。他の2社は1年間を通して、前の教材で学んだ内容を振り返ることができたり、遡って学習を積み上げられたりする仕掛けになっている。分冊であっても学校に置いておけるため、特段の不便はないと思われる。

- 基本観点2の「思考力・判断力・表現力等の育成を図るための配慮」において、実生活と結びつく活動の設定について特徴はあるか。
→ 全出版社とも、身近な実生活と結びつく活動として、学級での話し合い活動の場面を設定していた。

【書写】

- デジタル教材について、各出版社とも使いやすさに違いはなかったか。
→ 2次元コードがまだ準備段階の出版社もあり十分な比較ができなかったため、次回報告したい。

- 「国語」と「書写」について、同じ出版社であるメリットはあるか。
→ 同じ出版社であれば「国語」で扱ったものと同じ内容を「書写」の授業でも扱えるという繋がりはある。

② 社会

【社会】

- 日本文教出版では長岡京の遷都について掲載されていることに関わって、日本の色々な地域が出てくると思うが、近隣地域の取り上げ状況について3社で比較し

てどうであったか。

→ 長岡京以外の近隣地域の取り上げ状況についてさらに研究し、次回報告したい。

○ デジタルコンテンツとして資料動画が入っているのが特徴だと思うが、実際に確認して、使いやすさなど各社で違いはあったか。

→ 東京書籍はオリジナル教材であったが、他2社は既存の「NHK for School」などの外部ウェブサイトにつながっていた。

○ 東京書籍は上下の分冊となっているが、その点で使い勝手の違いはあるか。

→ 特に問題はないと考えている。分冊であっても、教室に置いて保管することが多いため、必要に応じて使用できる。東京書籍は持ち帰り時の負担軽減を重視していると考えられる。

○ 教科書を学校に置いている児童が多いという理解でよいか。

→ そのとおり。

【地図】

○ 地図と社会の教科書は同じ出版社でなくても問題はないか。

→ 特段、問題はない。

③ 算数

○ 算数は積み重ねが大切な教科であり、前の学年との連携や学び直しの必要もあると思うが、各出版社の状況はどうか。

→ どの出版社も「もくじ」により系統性が示され、単元をふり返ることのできる工夫がされている。

○ 「デジタルコンテンツ」とは、具体的にはどのようなものか。

→ 2次元コードを読み込むと、例えば「コンパスの使い方」や「分度器での角度の測り方」など、解説動画などにより子供たちの理解を支援することができるもの。その他にも、苦手な単元について動画を見ながら復習ができたり、実際に自分でブロックを動かしたりできるコンテンツなどがある。

○ 立体図形を把握するためのコンテンツなどもあるか。

→ グラフや立体の観察などが具体的にできるものもある。

○ デジタルコンテンツについて各社の特徴はあるか。

→ 数量でいうと、啓林館、東京書籍、大日本図書が1500近くある。その他は800や500程度であり、数量で比べると差がある印象であった。

○ 学校図書のみ「中学校への架け橋」という別冊があるが、中学校に向けた先取り

の内容であるのか。

- 中学校へつながる単元が分冊として特化されているもの。各出版社とも小中連携の工夫をしている中、この出版社のみ別冊になっているのが特徴である。
- 1年生の教科書で、啓林館のみ「すたーとぶっく」として別冊になっているが、この特徴についてはどうか。
- 啓林館にはA4判の「すたーとぶっく」が別冊でついている。実際に児童が数字を書いたり、点をつないだり、線をかき際に十分な大きさであり、破れにくい紙を使うなど工夫されている。分冊やサイズが大きめなのは東京書籍、啓林館、大日本図書の3社であった。
- 個別最適な学びの視点から、学習での躓きがあったときに「ここに戻ればいいですよ」という付録的なものはあったか。
- 問題が解けないときに「ここに戻りましょう」という単元同士の繋がりを示しているものがあった。日本文教出版以外は「フィードバック」というものが示されていたのが特徴的であった。

④ 理科

- 実験がたくさん出てくるが、今、乙訓地域の学校にある実験器具で対応できると考えて問題ないか。
- すべての学校の状況を把握してはいないが、現行と同じ実験内容であることから対応できると考えられる。
- 自然系統の資料について、地域性の特徴や差異はあるか。
- 信州教育出版社については地域素材が使われていた特徴があった。各社とも資料が載っているが、デジタル教材では「NHK for School」のウェブサイトリンクするものが多かった印象である。
- 理科の学習では教えられる・知っていくという活動が重要。一つの課題に対して自分たちで学び深め、行動していくという観点から、特徴的な出版社はあったか。
- 啓林館は使いやすい印象で、大日本図書は導入部分がダイナミックに書かれており、児童が何気なく問いを持ちやすい印象であった。啓林館は吹き出しがなくキャラクターもないが、その点で児童の素朴概念を引き出すことにつながるとも感じた。
- 資料集の扱いができる教科書が多いという説明だったが、色々な写真や図、絵を見比べて違いや特徴的なことはあったか。
- 大日本図書と啓林館は写真・現象をしっかりと見せる仕掛けになっていた。教育出版社、学校図書、東京書籍は導入部分を含め、写真の横に詳しい説明があるなどしっかり説明されている印象。吹き出しも多く、話し合いの流れが手取り足

取り示されている。啓林館と大日本図書はゆったりと、他社については資料集のようにしっかりと説明が書かれている印象であった。

⑤ 生活

○ 生活科は低学年児童が対象となり、遊びも大切な要素であるが、各出版社は乙訓の生活スタイルに合っているか、また、遊びの感覚から気付きにつながり、学習に繋げられる構成になっているか。

→ 乙訓の地域性との比較では、信州教育出版社を除いて、町なかの子どもたちの生活が中心であり大きな違いはなかった。幼小連携のスタートカリキュラムについては、すべての出版社で取り上げられており、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」についても一部掲載されていた。

○ 生活科では写真も大切と考えるが、写真の取り扱い方に工夫や特徴があったか。

→ 全体として、どの出版社も活動に意欲を持たせるようなワクワクさせるような写真を使用されている印象だった。啓林館は特に写真が鮮明だった。

○ 学校図書について「利き腕を問わず快適に書けるように配慮されている」との報告があったが、具体的にはどのような配慮であったか。

→ 書き込みする欄が右からでも左からでも書きやすいレイアウトになっていた。他社は様々な箇所に書き込み欄があるが、学校図書だけは利き腕を問わず、どれも書きやすいようなレイアウトになっている工夫があった。

⑥ 音楽

○ 2次元コンテンツの件で、音源や音質に違いはあるか。

→ タブレット端末を用いて聴く分には大差はないと思われる。また、鑑賞曲はCDをステレオで一斉に聴くことが多い。教育出版は動画が多く、「鐘の音」など曲をイメージしやすいもの、教育芸術社はメロディや旋律が取り入れられていた。

○ デジタルコンテンツについて、授業の中で活用できるものであるか。それぞれの出版社に特徴はあるか。

→ デジタルコンテンツは児童だけでなく教員が使うことも多い。教育芸術社は音楽づくりのコンテンツなどがあり児童が主体的に活用できる楽しみがある。教育出版は教科書にそのまま書き込みできるワークシートがあるのが特徴的だった。

○ 協働的な活動とは合唱の場合のパート決めなどを指すのか。発言例がどの程度出ている、逆に例が多すぎて自由な考えが狭められるようではいけないと思うがどうか。

→ 音楽はグループ活動が多く、歌唱ではどういう歌い方をするか話し合い、合奏ではリズムやメロディについて話し合っ決めて決める場面が多い。教育出版は自由度が高い印象。教育芸術社は吹き出しが多く、進め方がしっかりと示されている。

- 音楽の場合、教材がいくつか組み合わせて単元が出来上がっているため、それらの接続が出版社によって異なると思うが、特徴はあったか。
- 音楽づくりについて、教育出版は鑑賞曲を聞き、そのイメージや構成に合わせた音楽づくりという流れであり、教育芸術社は歌や鑑賞などが含まれていた。

⑦ 図画工作

- 各出版社について、何を狙いにどのような学習をするかが示されていると思うが、特徴的なことはあるか。
- それぞれ3観点のキャラクターや項目が分かれており、どのような力をつけるかが示されている。開隆堂は色分けによって、日本文教出版はマークによって示され、それぞれ3観点の狙いが分かりやすく工夫されている。
特に、1年生は「接続」を意識して、開隆堂は保育所や幼稚園での学びを振り返るページがあり、その後どんな学習をするかを示す構成になっている。
日本文教出版は写真数が多く、文字は少なめで各単元の導入部分が丁寧な印象。また、体と心をほぐして意欲を高めるための独自の「ずこうたいそう」が特徴的だった。

- 2次元コードなどで見られる動画については、特徴はあったか。
- 開隆堂は再生マークがあって動画が進められるが、マークが目にとどまりにくい印象。日本文教出版はアイコンが分かりやすかった。デジタルコンテンツでは立体作品が角度をつけて見られたり、道具の使い方などが動画で見られるなど各社とも工夫があった。日本文教出版は作家インタビューなどが見られ、開隆堂は順を追って再生できるので順番どおりに進められる特徴があった。

⑧ 家庭

- 家庭科は5・6年生が対象となり、「裁縫」や「調理」が特徴的と思うが、教科書の図や写真など、出版社間で特徴や差異はあるか。
- ICTコンテンツに差異があり、東京書籍の方が動画数は多かった。また、両社とも左利き向けの内容が含まれており、タブレットを使った学習を前提に、動画視聴を通して、調理過程が分かりやすい工夫がされていた。
また、裁縫の単元は開隆堂では2学期の期間を使ってたつぷりと学習する。一方、東京書籍は3学期だけとなっており、その点で違いがあった。
- 東京書籍の3学期の単元構成について支障はあるか。学習指導要領上はどうか。
- 裁縫は手縫いから始まり、ミシンを使う実習は開隆堂では2学期。東京書籍では3学期のみとなっている。5年生の3学期は繁忙なため、落ち着いてミシンの実習をするには3学期の設定だと厳しいと感じた。学習指導要領上は5年生で手縫いの学習の後にミシンの学習をするということは定められているが、学習時期は学校の裁量で決められるため、単元の入替え等で対応は可能である。

- 男女共同参画の視点から、教科書に使われる写真は適切であったか。
→ 例えば女性がピンクの服を着ているなどの偏りはなく、外国人や老若男女も登場する。ジェンダーを感じるような書きぶりやイラストはなかった。
- ジェンダーなど人権への配慮については2社で大きな違いはなかったか。
→ 人権の視点からの差異はなく、どちらも配慮されている。
- 各地域の取り上げられ方に違いあるか。
→ 開隆堂は全都道府県の代表的な食べ物、料理などが一覧に示されるなど、47都道府県の話題が満遍なく掲載されている点が特徴的だった。

⑨ 保健

- 性の多様性についての記述は、東京書籍、大修館書店、文教社、光文書院には書いてあるという理解で良いか。
→ そのとおり。
- ◎ 小学校3～4年生頃に「自分の性に違和感を感じた」というLGBTQの当事者の声を聞いたことがあるため、学習においても配慮を願いたい。
- LGBTQに関することで、とりわけ特徴があったか。
→ 際立った特徴はないが、4年生の体の発育の学習において触れられている。
- ◎ 新型コロナウイルス感染症や薬物乱用、パソコンによる健康被害に関する記載について、各社の特徴を確認してほしい。
- ◎ プライベートゾーンについて記述している教科書があるか次回報告いただきたい。

⑩ 英語

- デジタルコンテンツについて、出版社ごとに使いやすさの違いなどはあるか。
→ それぞれ操作性の違いはあるものの、使いやすさに大きな差異はなく、使い慣れることで活用が進むと思われる。
- 小学校の英語の教科書の難易度はどうか。
→ 授業者から見て、難易度を含め、使い勝手や学習の流れなどについて、いずれの教科書も特段の不都合はない。
- ◎ 外国語では「聞くこと」を重点的に行い、その次に「話すこと」「書くこと」を増やしていく流れであるが、中でも「書くこと」が多い印象は三省堂であった。

東京書籍は全体的にバランスの良い印象であった。

- ◎ 発音について、ネイティブの発音や動画を見るなど、低学年からの学習が重要と思うが、各社の特徴があれば次回教えてほしい。

⑪ 特別の教科 道徳

- まとめの部分に設問があるが、その質問数や内容についてはどうか。
→ 各社とも教材ごとに1～3問ずつ設問があった。発問によって自ら考え、自分自身の振り返りにつながるような内容であった。
- 日本文教出版には別冊ノートがあるが、先生方や児童の使い方に差異があるか教えてほしい。
→ 日本文教出版の別冊ノートは、児童自身が1時間ごとの授業を通じた感想や考えの変容などについて書けるもの。デジタル教材として感想用紙が用意された出版社もあるが、その他は1時間ごとでなく、全体を通して巻末にまとめて書く欄が設定されていた。1時間の授業ごとに自分の考えがまとめて書ける教材があると児童と教員の双方にとって活用しやすい印象である。
- 東京書籍、教育出版、学研は主題名が一覧で書かれているとあるが、そのメリットはあるか。
→ 一覧があることのメリットは1年間の見通しを持てること。学級の様子によって順番を入れ替えて行うこともある。
- 現在使用している教科書には別冊ノートはあるか。
→ ある。
- 朗読音声の有用性はどうか。
→ 朗読音声があることで、児童が作品に入り込んで学ぶことができ、学習が深められる点で良いと思う。教員が朗読音声を流すことで机間指導できる点も良い。
- ◎ 道徳ではいじめ問題が取り上げられることが多いと思うが、多様性についての取り上げ方、LGBTQの取り上げ方がさらに多くあってもいいと感じた。
- ◎ 教育出版以外にもLGBTQなどの多様性を扱った教材があるか、さらに研究して報告してほしい。